
収穫

久住祐治

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
収穫

【Nコード】
N4691Y

【作者名】
久住祐治

【あらすじ】
世界を旅する彼の、とある一幕。

銀色の髪、翡翠の眼、黒いローブを身に纏い、比較的大きな彼と同じほどに大きな鎌を背中に背負って、彼は常に旅していた。

「……寂れているな」

儂げな音色。

まるで楽器が奏でられたように美しいその声を聞くモノはしかし、人気の失せた家々に痩せ細った木々、水の出ない枯れた井戸に、朽ち果てた石垣たちだけであった。

彼の言葉通り、まるで死んでしまったかのようなその村にも、確かに命は残されていることを彼は知っている。

だからこそ、彼は一步、その中へと足を踏み入れる。乾ききった大地を踏みしめ、靴裏にへばりついた湿り気のある泥をその枯れた地が攫っていくのにも目をくれぬまま、彼は一目散にその家へと歩いていった。

彼が目指したのは、寂れた家々の中でも一際小さく、ともすれば見逃してしまいそうな大きさの、家とも呼べぬ小屋だった。

その壊れかけた木造の扉を三度叩くと、しばらくしてからゆっくりとその扉が開かれかけた。

「きゃっ！」

かけた、と言うのはつまり、その行為が最後まで行われなかったことを指す。

余りに脆くなっていたその扉は、三度の軽い衝撃によって崩壊寸前に追い込まれていた。そこで住人がその扉を押し開けてしまったため、いとも簡単にその扉は崩壊したのである。

「う、ごめんなさいっ！ 大丈夫ですか、お怪我はありませんか！？」

「あ、ああ、大丈夫だよ。それより、君こそ」

扉が突然崩れ去ったことに驚いたのだろう、可愛らしい声を上げて倒れた少女は、いそいそと立ち上がると彼の心配をし始めた。

彼は大丈夫だと返事を返すと、ざっと目の前の少女の見てくれを眺めてみる。あくまで、それは気づかれない程度にであるが。

少女の背丈は男よりも頭二つ分ほど小さかった。

頭にはくすんだ白い三角巾を被り、似たような色のエプロンを淀んだ黄色いシャツの上から着ている。下には淡い茶色のスカートを纏い、ボロボロになって申し訳程度にしか皮の部分が残っていない布と革の靴を履いていた。

「私は大丈夫です、物が壊れるのとかは慣れてますから！ えっと、貴方は……」

「突然押しかけてすまない、旅の者なんだが、ここにしか人気がないかったものだから」

「ああ、そういうことでしたか！ どうぞ、中へ入ってください！ 大したものは出せませんが……」

「いや、構わないよ、ありがとう。お邪魔します」

鶯色の双眸とびめづに金色の髪を腰まで伸ばした少女は、足で扉の残骸を脇へ除けると、彼を中へと招き入れる。

彼はそのことに礼を言ってから家の中に踏み入った。

一歩踏み出しただけで床がギィ、と音を鳴らす。そのことにはさして驚きを見せず、彼はゆっくりと家の中に視線を置きながら中へ入っていく。

やはり、というべきか、家の中はところどころに穴が開き、殆ど

の瓶などはバラバラに砕かれてしまっていた。

そんな中で、彼女本人が補修したのだろう、やや歪な形の椅子に腰掛けるよう進められた彼は、素直にそこへ腰を降ろす。思いのほか安定していた。

「どうぞ、薄いですけど」

「ありがとうございます」

彼女が出してきたのは、色の殆どない、けれど一応は香りのある紅茶だった。

それに礼を言っただけ含む。色は薄かったが、まだ味は残っていたらしく、まだ飲み物の範疇を出てはいなかった。

「この有様ですから、茶葉も手に入らなくなつて」

「……ここでは、一体何が起きたんだい？」

困っちゃいます、と明るく首を振った少女は、その問いに困ったような笑いを浮かべながら言葉を返す。

「よくある話ですよ。ここら一带の領主様は私たちから奪い取ることにしかしません。日に日に土は痩せ細り、領主様のお屋敷から遣わされる監察官は自分の分の上前をピンはねする為に税を重くして、その分を賄賂として少しずつ領主様に送る。だんだんと人は減つて、動けない女子供や老人までもが労働に駆り出されるようになりました。後は坂を転がるようにどんどん悪くなって、何も取れないと知った監察官までもが、ここから去っていきました。最後まで生き残っていたのは、私と母の二人だけです」

よくある話、確かにそのとおりだった。

このご時勢、貴族たちは如何にして下民から利益を搾り取るか、

それしか考えていない。与えず奪い続ければ、いずれ地は枯れ、血は尽きる。自明の理でありながら、それをやめようとするものはいなかった。

この村も同じ、ただそれだけだと、少女は皮肉気に笑ってみせるけれど、その目に諦めはなかった。

「お母さんは？」

「死にました。二年前に」

「……そう。嫌なことを聞いたね、すまない」

「いえ、もう踏ん切りつきましたから」

彼の問いに応えた彼女の言葉通りならば、この村の最後の住民は彼女であった。

二年前からたった一人、ここで暮らし続けてきたのかと、彼は聞いた。

「私、夢があるんです。お母さんが最後に飲みたがっていた水、その源泉を掘り当てるって夢が。それまで頑張るって決めてるんです」「けれど、村の井戸はもう枯れているだろう？」

「それは東側、私が掘っているのは西側の井戸なんです。きっと水が出てくれば、また土も元気になる、皆戻ってくるはずだから」

だから頑張ります！

彼女はそう言って微笑む。その笑顔が、彼には眩しかった。

ふと、彼女が思い出したように手を打つ。

「お名前！ 言ってませんでした！ 私はクレアって言います！」

「僕は、レイ。よろしく」

「あ、はい！ よろしくお願いします、レイさん！」

ぶんつ、と三角巾が飛びそうな勢いでお辞儀したクレアは、また楽しそうに笑う。

何がそんなに楽しいのかと聞くと、人と話すのは本当に久しぶりなのだと言う。

最後の会話は二年前、このご時勢では旅をする人間など本当に限られる。その中でここに立ち寄る確立など、ほんのわずかだろう。

「あの、あのつ、もしよろしかったら泊まっていきませんか!？」

「……君がいいなら、ぜひ」

「はい、もちろんですっ!」

嬉しそうに頷いたクレアは、夕食の時間が有るから、それまで話を聞かせてくれないかとレイに頼んだ。

快く了承したレイは、うきうきと話を聴くクレアに日が沈む少し手前まで、さまざまな話を聞かせていた。

翌日。

レイは日も昇らないうちに、クレアが井戸を掘っているという場所に来ていた。

そこにあつたのは、ざっと二〇メートル以上も掘られた縦穴と、そこに横たわる白い骨。

「……見られちゃいましたね」

「元から知っていたから。君はここで死んだんだね」

「はい。井戸を掘っている最中に、流行病でぼっくりと。あっさりやられちゃいました、てへへ」

いつの間にか真横に立っていたクレアは、そう言って残念そうに笑う。

レイは縦穴をそっと覗き込むと、小さく両手の平を合わせてからクレアに視線を戻す。その姿は、どこことなく透けて見えた。

「でも、これでようやくいけます。母の言葉を、ここに私たちがいたってことを知っておいて欲しかったから」

「……はやく行ってあげるといい。お母さんも待っているだろうか」

「……はい。お話楽しかったです、最後に楽しい思い出が残せてよかった」

ゆっくりと、手足から徐々に透けていくクレア。

「それじゃあ、私は行きます。レイさん、お茶飲んでくれて、ありがとうございました」

「ああ。美味しかったよ、ありがとう」

「……いつか、また！」

「ああ」

レイの感情の见えないその返事に、クレアは嬉しそうに微笑んだ。そして、首筋までが消えていき。

村に残っていた最後の夢は、それでようやく晴れたのだった。

「……。行くか」

用は済んだとばかりにそこから立ち去るレイ。
やがて、砂煙が吹いた後には、彼の姿はどこにもなかった。

彼の名はレイ・ハーヴェスト。常に旅を続けている、鎌を背負った風来坊である。

その正体は、いずれ皆様の元に訪れたときにも。

(後書き)

いかがだったでしょうか、レイの旅路的一幕。

別にどこかの作品から引っ張ってきたわけでもなく、ただ書きたくなかったので書いたと言う一発ネタです。

彼がどういう人なのか、むしろ人なのか、それは皆さんのご想像のままに。

私の中にも正解はありますが、皆さんの考えたそれも正解です。ま

あ、わかりやすくしてありますがw

面白かったら感想いただきたいなあ、なんて思ったり！ ね！

それでは、お読みいただきありがとうございますとございました。

またいずれ、どこかで。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4691y/>

収穫

2011年11月17日17時40分発行